

令和二年十月八日

加賀山 六度満行院 満福寺

お同行各位

十月お寺の日のご案内

すがすがしい秋晴れのもと、爽やかな日が続いております。皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。

十月といえば、運動会を思い浮かべる時期ですが今年はコロナウイルスの影響で各地の運動会も中止になるところも多いですが、六満こども園の運動会は従来とは形を少し変えて園児と保護者のみの開催を予定しております。子ども達の元気いっぱい頑張っている姿を檀信徒の皆様にもご覧頂きたかったです。今年のご覧頂けないのがとても残念です。

京都もGoToトラベルキャンペーンのおかげで、多くの観光客が訪れ、各地少しずつではあります。テレビをつけるとコロナ関連や芸能人の自殺のニュースが後を絶たず、多くの情報のせいで自分達の心を苦しめてしまっているように思います。

人は簡単に死ぬるものではありません。それなのに、自殺するのは余程の苦悩があつてのことだと思えます。多くの人が自殺に対して。「生きていけば、きっといいことがある」「死ねば悲しむ人がいる」と言っていると思います。しかし、生きていてもいいことがあると思えず、死を決意した人にとって、それがどれほどの抑止になるでしょうか。仏教では死んではいけない理由を次のように教えられています。

釈尊が、托鉢の道中。大きな橋の上で、一人の娘がたもとへ石を入れている。娘のそばまで行かれた釈尊は、優しくその訳を尋ねられた。相手がお釈迦様と分かった娘は、心を開いて苦しみのすべてを打ち明けた。

「私はある人を愛しましたが、捨てられてしまいました。世間の目は冷たく、やがて生まれてくるおなかの子供の将来などを考えますと、いつそ死んだほうがどんなにましだろうと苦しみます。どうかこのまま死なせてください」と、泣き崩れた。釈尊は哀れに思われ、こう諭された。

「ある所に、毎日、荷物を満載した車を、朝から晩まで引かねばならぬ牛がいた。つくづくその牛は思った。『なぜ自分は、毎日こんなに苦しまないといけないのか、一体自分を苦しめているものは何なのか』。そして、『そうだ。自分を苦しめているのは間違いないこの車だ。この車さえなければ、自分は苦しまなくてもよいのだ。この車を壊そう』。牛はそう決意した。ある日、猛然と走って大きな石に車を打ち当て、壊してしまったのだ。それを知った飼い主は、こんな乱暴な牛には、余程頑丈な車でなければ、また壊されると思い、鋼鉄製の車を造ってきた。それは今までの車の何十倍の重さであった。その車に満載した重荷を、今までのように毎日引かせられ、以前の何百倍も苦しむようになった牛は、今更壊すこともできず、深く後悔したが、後の祭りであった。

牛は、自分を苦しめているのは車だと考え、この車さえ壊せば、自分は苦しまなくてもよいのだと思った。それと同じように、あなたはこの肉体さえ壊せば、苦しみから解放され、楽になれると思っているのだろう。あなたには分からないだろうが、死ねばもっと恐ろしい苦しみの世界へ入っていかねばならないのだよ。その苦しみは、この世のどんな苦しみよりも、大きくて深い苦しみである。あなたは、その一大事の後生を知らないのだ」

娘は、自分の愚かな考えを深く後悔し、釈尊の教えを真剣に聞くようになり、幸せな生涯を生き抜いたという。

人は一人では生きていけません。他の人の存在があつてこそ人は人として生きていくことが出来るのです。しかし、周りばかり気にしながら生きてしまうと、そのことで自分自身を苦しめてしまうことに繋がり、自分で自分の命をたつてしまうこともある。

お悟りを開かれた際にお釈迦様は「最終的には、自分を依り所としなさい」と教えられています。テレビやスマホを見るとコロナ関連や自殺などのニュース、誹謗中傷のSNSなど自分を苦しめるものが数多く存在する中、自分自身を客観的に見て、今のありのままの自分をしっかりと観察して、余計な事を色々と考えてしまつて苦しむよりも、今日をどう生きるか、毎日毎日大切にしないとと思うはずです。『失敗しても生きていくだけで十分頑張っている。苦しい時は頑張らなくてもいい。寄り道しても、立ち止まっても大丈夫、自分に少し余裕が出来た時に前に進むぐらいの感じがいい。』と思えるような気持ちの持ちようが仏教の大切な教えなのです。そのことがきつと頑張ってしまう皆様が本当の意味で楽に生きることの豊かさを与えてくれるのではないかと思います。十月は本堂でお寺の日をさせて頂きます。賑々しくお参り下さい。

◎十月お寺の日

・十月二十一日(水) 一時三十分より 満福寺

「自分の命の大切さについて」

※当日、満福寺にお越しになれない方はライブ配信も同時に行いますので、ホームページよりご覧いただけます。